

検査業務における出火リスクのアセスメント

◎阿部 幸輝¹⁾、阿部 芙沙子¹⁾、大塚 隼人¹⁾、鈴木 貴志¹⁾
鶴岡市立荘内病院¹⁾

【はじめに】日本病院会がまとめた報告によると、病院火災でもっとも多い原因は放火であった。また、検査室から直接出火した事例や医療機器から出火した事例は数%であった。それをふまえると、臨床検査技師が火災発生現場に居合わせる可能性は低いと考えられる。しかし、精密機械や加温装置が密集し、配置された検査室は出火の危険性に絶えずさらされている。さらに、検査室の試薬は、発火の危険性だけでなく爆発や引火すると有害なガス、蒸気の発生も考えられる。火災シーズンの到来を契機にあらためて試薬や精密機器を消防法の観点から管理するため、消防局の指導のもと検討を行った。【化学物質（危険物）の管理と保管】危険物とは、消防法上で定められた火災・爆発のおそれのある化学物質である。また、他の物質と混在することによって燃焼を促進させる物質も含まれる。消防法では危険物と定められた化学薬品について、各部屋で保管できる量が、指定数量として定められている。消防法の観点から指定数量の0.2倍以上保管する場合、少量危険物に該当し、危険物の専用保管庫や倉庫を敷地内に設けなければな

らない規制がかかる。当院の検査室では、指定数量の倍数が0.44であったため、試薬保管量を見直した。【電源プラグの点検】検査機器で大型のものは、プラグとコンセントを設置した時から長期間差し込んだままの状態が多い。その後、配線の劣化やトラッキングの影響で火災の危険性は増す。また、電源部位の確認だけでなく配線全体の確認も重要である。断線箇所は電流の通り道が狭いにも関わらず同じ電流が流れるため発熱し火災の原因となる。当院でも実際に、点検時に古い乾燥器の配線で断線箇所を見つけた。

【まとめ】検査室は化学物質、精密機器を駆使し様々な検査を行っている。これらのツールは大切な検査結果を生み出す一方で、高い火災リスクを伴っている。今回検討を行ったことにより、電源コードの断線箇所や検査科全体の火災に対するリスクアセスメントを行えた。検査室には出火、延焼の危険性が多種多様に潜んでいることを職員間で共有できたことは火災予防の第一歩だと考える。

鶴岡市立荘内病院 病理科 阿部幸輝

0235-26-5111

文書管理システム導入による作業とその運用効果

◎小林 徹¹⁾、井口 啓太¹⁾、丸山 奈穂¹⁾、澁谷 大輔¹⁾、今井 瑠美¹⁾、柴田 真由美¹⁾
新潟大学地域医療教育センター・魚沼基幹病院¹⁾

【はじめに】当院は2024年10月にISO 15189:2022の移行審査の受審を契機に、文書管理システムLab'Q（ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社）を導入した。文書管理者の視点から当院の文書管理システムについてこれまでにを行った作業とその運用効果、そして今後の課題と展望について報告する。

【運用開始前】臨床検査科の部門や要員、文書を格納するフォルダや文書登録などのLab'Q内の設定、操作マニュアルの作成と要員への操作説明などを行った。

【運用開始後】検査科内の部門異動・入職・退職時の要員の設定、年度毎のフォルダ作成、保管期間を過ぎた文書の削除、データのバックアップなどを行っている。

【運用効果】従来の文書リストの作成は文書の登録・改版・廃止が行われると文書リストの手書き修正やExcelデータの修正をし、四半期毎に文書リストの再印刷を行っており、紙ベースで管理していた。それがLab'Q内のISO文書の原本フォルダをCSV出力し、Excelの機能を使用して、文書リストを容易に作成できるようになった。さらにLab'Qで

保存できるようになったため、文書リストを印刷する必要もなくなった。文書レビューもリストを同様に作成でき、確認が以前に比べ容易になった。紙で文書を回覧していた時は回覧中に文書の紛失があったが、Lab'Qで承認ルートという機能を使用し、確認、承認、周知を行うことで、回覧文書の紛失がなくなり、どこで文書が滞っているかもすぐに把握できるようになった。

【課題と展望】記録類はその作成者に承認ルートを選択してもらい回覧を行っているが、度々選択間違いが発生している。そのため要員へ操作の説明や承認ルートの設定を間違えないように選択できるような誘導、マニュアルの作成が重要である。またExcelの機能を活用することで作業効率のさらなる改善が見込める。しかし、それを習得する人員や時間、知識の共有が課題である。今後はLab'Qのメリットをさらに生かし、文書管理の最適化を行っていきたい。

連絡先：魚沼基幹病院臨床検査科 TEL 025-777-3200

臨床検査業務における生成 AI の多面的活用と展望

◎山本 肇¹⁾、高田 直樹¹⁾

一般財団法人 竹田健康財団 竹田総合病院¹⁾

地域における医療機関は、人口減少、人材不足、経営難、過疎化の進行といった複合的課題に直面しており、限られた人的資源を本質的業務に集中させるための支援ツールとして、AI の導入が注目されている。生成 AI の活用事例と展望について報告する。

当院では、生成 AI を臨床検査業務に導入し、①文書作成、②教育、③品質保証、④人材育成の 4 領域で多面的に活用してきた。①文書作成では、SOP などの文書作成業務や寄稿原稿の草案生成・校正支援に活用し、作業時間と表現の質を改善した。②教育では、臨地実習ガイドライン 2021 に準拠した実習テキストの刷新やスケジュール管理などに活用することで、標準化と指導者の負担軽減、体系化による学生の理解促進を図った。また、検査体験事業における動画作成において構成・ナレーション・イメージ画像生成などで AI を活用した。この事例は、採血や検査説明用の動画、院内外への教育資源としての活用にも有用である。③品質保証では、精度管理における AI の導入期待とその効果について商業誌へ掲載している。またその 1 例として、AI 技術

を基盤とした新規臨床検査機器の開発にも協力している。

④人材育成については、院内で AI 活用研究会を定期開催し、プロンプト演習や活用事例共有、ガイドライン整備を通じて職員のリテラシー向上に取り組んでいる。生成 AI はすでに個人利用を超えて幅広い業務に活用され、現場に根付いてきている。

AI 活用は、創造性、効率性、生産性の向上に大きく寄与し、限りある人的リソースを臨床検査技師の本質的業務に充てることを可能にする。これにより、品質向上、アイデア創出、スキル拡張につながるものと考ええる。利用拡大促進の一方で、種々のリスク管理に留意しなければならない。ヒューマンスキルと AI スキルを融合した未来型検査室の構築は、これからの検査室の重要ミッションと考える。連絡先 0242-29-9924

札幌臨床検査技師会 データ統一化プロジェクト委員会による精度管理向上への取り組み

◎田中 真輝人¹⁾、横山 沙織²⁾、松本 道明³⁾、笹 亮太⁴⁾、米井 誠⁵⁾、宇佐美 貴之⁶⁾、米澤 仁¹⁾、木田 秀幸⁴⁾
札幌医科大学附属病院 検査部¹⁾、市立札幌病院 検査部²⁾、JR 札幌病院 臨床検査室³⁾、札幌北楡病院 臨床検査技術部⁴⁾、第一岸本臨床検査センター 札幌⁵⁾、北海道大学病院 検査・輸血部⁶⁾

【はじめに】

札幌臨床検査技師会（以下、札幌臨技）は、会員約 1,600 名を擁する地区技師会である。「会員に一番近い技師会」を目指し多様な事業を展開しているが、その一つに地区の精度管理向上を目標とした事業があり、札幌臨技データ統一化プロジェクト委員会（以下、本委員会）が中心となって活動している。本委員会では、昨年度から従来の取り組みをさらに拡充し、地区の精度管理向上を目指した活動を実施している。本演題では、本委員会の具体的な活動内容と、得られた効果について報告する。

【活動内容】

- ① 北海道臨床衛生検査技師会精度管理調査（北臨技サーベイ）への参加促進
- ② サーベイ試料測定時の注意点に関する周知
- ③ 北臨技サーベイで C/D 評価となった施設への原因解析および是正処置報告書の提出依頼
- ④ 是正処置報告書内容の解析、評価
- ⑤ 上記解析結果と精度管理に関する講演会の年度末開催

- ⑥ 札幌臨技会誌（隔月発行）での精度管理関連記事の連載
- ⑦ 是正処置報告書の様式を刷新し、経験年数の浅い会員でも記載しやすく原因解析および是正処置が容易となるよう運用を開始

【活動の効果】

本委員会の活動内容は、札幌臨技会誌での連載や講演会を通じて会員に繰り返し周知された。中でも、新様式に刷新した是正処置報告書は、実際に活用した会員から「記載が容易」、「経験の浅い技師でも有用」、「原因解析や是正処置の意義が明確となった」といった肯定的な意見が多く寄せられ、委員会活動の有用性が示唆された。その他の効果については、本年度の北臨技サーベイ結果ならびに報告会（11 月予定）に基づいてさらなる評価を行い、詳細については当日報告する。

【結語】

札幌臨技は今後も、本委員会を中心に地区全体の精度管理向上を目指した一連の取り組みを継続していく予定である。

（連絡先：011-611-2111 内線：36430）